

第5回 見えないものを信じる想像性 ～ この力がないと生きていけない！ ～ 見えない世界を生きることについて



講師 岡村 由紀子 氏

1 はじめに

“見えない世界を生きる”とは、乳児から幼児に向かう中で、「ふりをする→見立てる→つもりになる→ごっこあそびをする」姿として表れます。

これらの力の大切さについて、加藤繁美は「未来を描ける力とともに、その未来やイメージの中の世界を仲間と共有したという力が感性的土台となり、人間信頼や人間連帯の力を育てる」と言っています。また、河崎道夫は「我を忘れるほど夢中になる経験と、見えない世界をイメージして共有しながら遊ぶことが、リアルな自我の形成にとっても重要だ」と言っています。これが、自己肯定感につながる力になっていきます。

2 0歳児の時代

6,7か月の頃、握っていたおもちゃが落ちると探そうとします。これは“見えない力”を獲得していく時の子どもの一つの姿です。

8,9か月くらいでは、おもちゃに布をかぶせると自分で布をとろうとします。これは、物の永続性が理解できたということです。「いないいないばあ」も同じです。これがおもしろいのは、隠れた先に大好きな人が出てくるのがわかるからです。赤ちゃんは、それを待っているわけです。

10か月の頃、「ばいばい」や「おつむてん」をまねするようになります。これを即時模倣と言います。この力が0歳児に育っていることが、この先、想像力を育むための土台になります。こんなに小さいときから、そういう力があるということです。

この頃のあそびは、人とのやり取りを楽しみます。

予測と期待です。遊んでもらうということは受け身のようでありながら、主体性があり、これが主体的なあそびの土台になります。共感が、想像力の基底になるのです。

3 1歳児の時代

大人がたくさんかかわることで、子どもは見立てる世界を広げます。大人が砂をまるめて「おだんごです。どうぞ。」と渡すと、子どもは口に入れなくて、もぐもぐ食べるふりをします。これが見立てるということ。つまり、うそを見立てるわけです。

この力のベースになるのは、泥は食べられないという認知ができていることです。うそこのつもりなのに本当に口に入れてしまったとしたら、それは、まだ見立てる力が育っていないからです。

この時期は、記憶力が発達してきます。空箱を新幹線にして遊ぶことができるのも、新幹線の記憶があるからです。本物ではないけど、本物に見立てて遊ぶ…これが成立するのは2歳児ですが、1歳児でも本物として見え始めます。これが象徴機能です。

見立ては、子どもの心の中で、言語としての言葉が認知され始めている姿でもあります。言葉が生まれてこないで見立てることは難しいです。自分の心の中に豊かな言葉、見通しが育ってくるから、見立てるあそびができるようになります。また、遊ぶ相手がいることも、見立てて遊ぶときの条件です。

ここでいう“記憶”とは、テレビの中の話ではなく、身のまわりに起きたことを指します。また、それを思い出して再現することができます。これを生活再現あそびと言います。

この時期の記憶は、個性的（個人的・主観的）な出来事の実験です。例えば、自分の見た犬が小さい犬であれば、「犬は小さい」というイメージになります。自分の生活のまわりにあるものが、判断基準になるということです。

また、漠然としたイメージからはっきりしたものになります。しかし、この頃は生活経験が少ないので、友達とはイメージに違いがあります。絵本の世界を体で表現することができるようになりますが、自分でイメージすることはまだ難しいです。

1歳児は質問期です。正解を追求するよりもそのおもしろさにつきあひましょう。子どもは、そのやりとりが楽しいのです。“不思議”に付き合うのが、保育者の仕事です。

4 2歳児の時代

物を見立てる力がますます強くなり、大人の支えで“つもり”の世界を育てます。2歳児は“その気”になって見立てます。その対象は家の人や自分の生活にかかわるものです。しかし、大人が支えないと、この遊びは続きません。先生を介して友達とつながり、イメージが広がっていきます。一人一人のイメージが同じではなく、それぞれのイメージの中で遊べる時代です。

絵本を見ると、登場人物に共感してドキドキするようになります。経験したことがないことも想像する力がつき始めていますが、先生の支えがないと、それはすぐに消えてしまいます。

ここで、ごっこあそびについて考えてみます。

ごっこあそびでは、子どもの見立てる力に合わせて室内環境を作ることが大事です。見立てる力が弱いとトラブルも起きますが、トラブルは他者を知るチャンスだとも言えます。保育者が、個々の見立てているものの違いを伝えてあげるといいですね。

2歳児は“それらしさ”がでてきて、イメージにふさわしい行動をとろうとします。これが、結果と

して、自己コントロール力を育てます。〇〇らしくふるまうことは、自分をコントロールすることだからです。これは、ごっこあそびという楽しい中でこそやれることです。

また、その役になりきるために、見通しが持てるようになります。例えば、お母さん役をやるためには、次に何をしたらいいかが分かっていないと、その役になれません。

ごっこあそびを豊かにするには、文化的な経験と生活が豊かであることです。ですから、園では、なるべく原理原則を大事にし、子どもに本物の経験をさせたいと思います。子どもがあこがれて、まねっこしたくなる材料が必要なのです。

5 3歳児の時代

見立てる力が豊かになるとともに、イメージの世界を楽しく感じる経験を土台にして、自らがイメージを創り出したり、友達のイメージを自分に取り入れたりする力が活発になります。他者の創るイメージの世界と自分が夢中になる世界をつなげて遊ぶことができるようになるのです。

3歳の頃の思考の特色としては、①個人的性質が強いが経験に基づく思考ができるようになること、②子どもの視点だと周りが大きく見えるがそれは現実や事実と一致しないこと、③応用的ではなく、前にやった経験をあてはめようとするのが挙げられます。

例えば、ゾウなら鼻が長いとか、ウサギならぴょんぴょん跳ねるとか、対象をデフォルメして一番強調されるもの（代表機能）を認識できるようになり、それを自分の模倣に取り入れます。

いろいろな質問をしてくるようになりますが、他者の理屈は関係なく、自分なりの理屈で考えます。そんな思考があそびの中にも見られるようになります。

3歳児は、「これはうそっこのジュースだから飲

んじゃだめ」と言いつつ、ごっこあそびをやっています。うそこと本物がわかっているけれど、それを一緒にして生きている。そのどちらの世界も矛盾にならない、そういう時代です。

人に譲ったことのないような子であっても、ごっこあそびの中だと友達に譲ることができる…だから、トラブルに対して、ごっこの世界で切り替えをしてあげたら日常もうまくいくかもしれません。

ごっこあそびには、その役になる楽しさ、役の行為のまねをする楽しさ、道具を使う楽しさ、見立てや設定の楽しさ、やりとりの楽しさ、といった多様性があります。3歳児は、大人が見とれてしまうくらい、その役に没頭します。人のことは関係なく、自分が俳優です。それが3歳児の“ごっこ”の時代です。

6 4歳児の時代

3歳児の時代をベースに他者が見えるようになり、「第2の自我」を創る時代です。自分だけでは創り出せない他者の世界を楽しむ機会が多くなってきます。4歳児は、なんとなく時間の連続性が分かかってきて、長期で取り組む“うそこの世界”が可能になります。「～だから～なんだ」と考える力もついてくる時期です。

この頃のあそびの特徴として4つ挙げます。①人数が増え、協働的・組織的になります。大勢のイメージを共有して遊ぶようになります。②イメージが大きく、豊かになります。全くあり得ない世界も、集団で楽しめるのです。③その結果として、ごっこあそびに、多様な役割が入ってきます。④それらしさにこだわるようになります。例えば、給食の先生なら三角巾やマスクをつけるといった具合です。

子どもの中に、「第2の自我」という他人のイメージを自分の中に取り込むことにより、友達同士と一緒にイメージを広げていくことができるのです。うそこと科学的思考が入り乱れる入口です。です

から、保育者には、うそこの面白さを楽しむ感性が求められます。

7 5歳児の時代

仲間と豊かにかかわり、「第2の自我」が確立する時期です。仲間とともにダイナミックにイメージを創り出し、仲間との関係を深め、豊かにあそびを経験する時代です。

この頃、時間の流れを連続して捉え、自分の変化を過去・現在・未来と順序立てて考えられるようになります。

また、多面的な理解が進むので、みんなで立ち止まって考え、価値ある活動をめざすようになります。ですから、5歳児の活動では、話し合い活動が大切です。イメージ能力がないと、話し合いはできません。自分の見えない世界を言語化し、相手の見えない世界を言語で聞いて、それを重ね併せてまた返す、という高度な活動です。話し合うことで、お互いを認め合う関係が育っていきます。

この時期、認知も思考も話し合い活動も豊かに発達してきているからこそ、ダイナミックなイメージを創り、時には親や地域を巻き込んだ楽しい活動を生み出したいものです。

さらに、5歳児は、書き言葉の世界への準備期でもあります。文字を書くということは、実は、イメージをすること(想像性)と密接に関係しています。ヴィゴツキーは「文字の前は想像性」と言っているくらいです。

文字を書くためには、いくつかの条件が必要です。1つめに、“よく動く手”。つまり、体ができていることです。これは、乳幼児期のあそびで育ちます。楽しい中で生活しているからこそ、よく動く手になるわけです。2つめに、“集中する力”。これもあそびの中で育ちます。夢中になって遊んでいることが、結果として学習の準備につながるわけです。3つめに、“空間認知”。上・下・右・左・斜め…が分かっ

ていないと文字は書けません。これは、生活の中で育ちます。4歳半を越えたくらいから、こういった位置が分かる言葉を、生活の中に意識的に入れていくことが必要です。4つめに、“音階の文節”。「り」と「ん」と「ご」の3つの文字を並べて読むと「りんご」になるとわかること。言葉の分解ができることです。これは、言葉あそびやしりとりをやる中で育ってきます。5つめが“想像性”です。文字を使うということは、紙の中に、その光景がイメージできることです。文字は、イメージがないと成立しません。そして、これが育つのは、乳幼児期の生活とあそびの中なのです。

自分の気持ちを人に伝えたい時、文字を使います。文字とは、自分の思いや願いを伝えるためのものなのです。そして、文字を使うことができるようになるための土台を創るのが、乳幼児期の教育なのだと思います。乳幼児期は、抽象的な概念は、まだできていなくて、具体的に体を通して認知する時代です。その時代にあった教育を考えていくことが大事です。

8 大人になることを見通して

人が生きていくためには、“未来を描き出す力＝見えないものを信じる力”が必要です。こうした力を持っているのは、人間だけです。そして、今が苦しくても未来を見つめ、何が必要かを考え、現実を変え、生きてきたのが人間の歴史です。

未来を描けない人間は絶望的になり、自ら命を絶つ人もいます。現代の若者に、未来を描けずに多くの問題行動を起こしている人も少なくありません。苦しくても未来を描き、切り開いていく力を育てるために、人格の中に、“未来を描き出す力＝見えないものを信じる力”を育てることが必要です。

仕事について考えてみても、言われたことをするだけでは十分な仕事にならないことを実感します。子育ても保育も仕事も生きていくことも、みんな、

この力が必要なのです。

そうした力の基本が、乳幼児期の遊びや生活の中にあることを意識して、保育をすることが大切だと思います。

第5回 保育者資質向上研修会 平成28年9月13日 会場：焼津市総合福祉会館ウエルシップ
--